

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会
会長 竹之下 洲一
編集者 広報部 恒吉 一洋

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 0995(65)1553

藺牟田・樺山氏の歴史 (藺牟田方面史跡探訪)

永富 巖



松ノ川内街道



樺山久美・五輪塔



大翁寺跡仁王像

蒲生町西浦から旧道・松ノ川内街道（江戸時代の藺牟田領主や島津歳久が利用したといわれる）を通り、藺牟田の史跡をめぐり、歴史の一端に触れました。

藺牟田の名は、文保元年（1317）の「伊佐庄日置北郷領家雑掌地頭代和与状」に初めて出てきます（ぶんぼう 祈答院町郷土史）。名前の由来は、藺牟田の沼に藺草いぐさが多く生えていることから名付けられたと伝えられています。

祈答院地域一帯は、平安時代には大前氏おおくま、鎌倉時代には渋谷氏が支配し、藺牟田もその支配下にあったと思われます。藺牟田は、室町時代の1400年頃藺牟田氏（渋谷一族）の領地となり、戦国から江戸時代にかけては島津氏公領ほんごう・北郷氏（都城島津氏）・宮之城島津氏・日置島津氏と領主が変わりました。江戸時代に入り、慶長19年（1614）に樺山久高かばやまが領主に任命されると、その後は明治2年（1869）まで255年間、樺山氏の私領として続けました。

樺山氏の初代は、島津宗家4代忠宗の第五子すけひさ資久ひゅうがもろかたぐんです。日向諸県郡庄内（現都城市）の樺山に居を構え、樺山氏を称した島津分家の一族です。

樺山氏は、6代から都城を離れ、堅利けじり・生別府おいのびゅう・横川むかさ・穆佐もびき・百引と拠点を変え、11代久高の代に藺牟田を領し、ここが安住の地となり氏神・氏寺・一族郎党に至るまで全て藺牟田に移しました。（祈願寺普賢院・菩提寺大翁寺だいおうじ・菩提寺華巖寺かがんじなど）

樺山氏は藩の家老として藩政を担い、殖産興業を講じ、新田開発・植林を奨励し地域の発展に寄与しました。民政は領内にくまなく行き届いていたのでしょう。

島津 12 代忠昌の生き様

濱口 純則

「文明の大合戦」といわれる藺牟田古城跡まで来て思い出しました。城攻めの総大将は島津忠廉^{ただ}、命じたのは宗家 11 代島津忠昌^{ただまさ}。忠廉は戦巧者であったといわれています。時代背景は「国中騒乱」といわれた戦国時代です。

忠昌は当初出家して市来の龍雲寺に入り、源鑑と称しました。10 代当主立久^{たつひさ}の死去により還俗して家督^{かどく}を継ぎ、11 代当主となりました。忠昌は軍事面よりも文学に優れ、文明 10 年 (1478) には桂庵玄樹^{けいあんげんじゅ}を招き朱子学^{しゅしがく}を講じ薩南学派の基礎を築きました。水墨画の普及や国内外の貿易取引も奨励しました。



島津忠昌夫妻逆修塔

文明 16 年 (1484) おび 飲肥^{におび}の領主新納忠^{にいりただ} 続^{つぐ}と隣の櫛間の領主伊作家^{いさ}の島津久^{ひさ} 逸^{やす}が勢力争いを始めました。忠昌は忠廉に新納忠続の救援を命じました

が従わず、菱刈・東郷・入来氏らと組んで反旗^{ひるがえ}を翻しました。忠昌及び島津本家の主体性の欠如と求心力の低下が明白となり内乱に苦しみました。万策尽きて西行法師^{さいぎょう}の歌を辞世とし自殺しました。永正 5 年 (1508)、享年 46 歳。忠昌の逆修塔^{ぎやくしゅうとう}*は肝付町の高山の蘭溪道隆^{らんけいどうりゅう}が開山したといわれる禅寺の道隆寺跡に、墓所は鹿児島市の福昌寺にあります。

*逆修塔→死後に功德^{くどく}を得るため、生前に建てる自分の墓碑^{そとば}や卒塔婆。逆修供養塔とも呼ばれる。

ガイド実践報告

「JTの森重富」ガイドウォーク

竹之内 茂



平成 29 年 9 月 29 日に JT 南九州支社の社員研修 (80 名) が、「白銀坂」から「さくら見晴台」を巡るコースで開催され、私共歴史ボランティアガイドと自然ガイドでご説明しました。

「JT の森重富」は、日頃から植林や間伐など森林保護活動を行っている JT (日本たばこ産業株式会社) が、白銀坂の散歩を楽しむ人々のために、白銀坂の途中から登れ、錦江湾と桜島を眺めることのできる場所として平成 20 年 (2008) に開設しました。

「さくら見晴台」から眺める錦江湾 (始良カルデラ*) や江戸時代まで存在していた「吉野馬牧*」の話を交えながらの楽しいガイドウォークとなりました。

*始良カルデラ→2 万 9 千年前、始良火山が大爆發し山体が空洞化して陥没した。そこに海水が



流入して今の錦江湾が形成された。南北 23 km、東西 24 km の世界でも類のない巨大な「海域カルデラ」である。

*吉野馬牧^{うままき}→吉野から白銀坂にかけてあった周囲 28 km の広大な藩営の馬牧。毎年 4 月に 2 歳馬を柵に追い込むための「馬追い」という行事があり、1 万人以上の人夫が招集された。

8月のガイド実践から 始良市社会科部会ガイド報告

玉利 良一



加治木屋形跡

ほぼ毎年、私たち始良歴史ボランティア協会は、市内の先生方に始良市内の史跡をご案内しています。

昨年は山田小学校の先生方に、そして今年は8月3日に市内小・中学校社会科部会の先生方に史跡のガイドをさせていただきました。

今回は義弘公関連史跡のうち、加治木屋形跡（写真参照）、加治木郷土館、江夏友賢墓、実窓寺じかわら積跡、池田助右衛門顕彰碑、木田の田の神、くわしほこ精矛神社の順でガイドしました。

当日はとても蒸し暑い日で、汗を拭き拭き、お渡しした資料に熱心に書き込まれる先生方の姿が印象的でした。

交通事情も予想以上に順調で、事故やけがなどもなく、予定より30分ほど早く終了しました。先生方の熱心な姿勢とご協力に心から感謝いたします。

夏休み体験学習 はにわをつくろう

永山 はるか

7月27日におこなった体験学習会では、小学3年生から中学1年生が、小さな人物埴輪じんぶつはにわを作りました。最初にパソコンで学習をし、埴輪などの画

像を見ながらイメージを膨らませました。幅広い年齢の子どもたちに合わせて埴輪にこめられた意味を説明するのは大変難しいものでした。

本来の埴輪は粘土ひもを輪積みにして作られますが、今回は粘土の塊をカキベラでくりぬいて、胴体の空洞を作りました。表面は木の板で整え、髪型は美豆良・島田髻しまだまげの説明をして男女の違いを表現しました。勾玉まがたまを貼り付けたり、三角文・同心円文などの刻線を描いたりと装飾を施し、魔よけの意味合いを持たせた埴輪ができました。

3週間乾燥させた後、埴輪を帖佐人形の窯で焼いて子どもたちに渡しました。



はにわづくり

にぎわった体験学習会

歴史民俗資料館では、はにわづくりの他に帖佐人形・勾玉・トンボ玉・Myはんこづくりも実施しました。それぞれの学習会にたくさんの子どもが参加して楽しく製作に励んでいました。（保護者参加の学習種目もありました）



Myはんこづくり

西郷の腰掛け石

坂元 清美

明治10年(1877)8月15日、延岡の北方長井村で政府軍に囲まれた西郷軍は、16日西郷隆盛の発した解軍令により解散しました。この時点で政府軍に下る者や傷病兵を除き、西郷軍は600名ほどであったといわれます。

17日深夜、高く険しい可愛岳^{えのだけ}を突破して政府軍の囲みから脱出した西郷一行は、21日に三田井(西臼杵郡高千穂町)に達し南へ向かいました。途中政府軍の追撃・迎撃をかわし、28日には小林・加久藤を経て29日に横川に入りました。

8月30日夜、有川(溝辺町)を経て山田に到着しました。2月の挙兵以来6ヶ月に及ぶ野戦や山中突破で衣服は破れ、草履^{ぞうり}もなく素足の者もいたそうです。

山田に着いた西郷一行は、下名新馬場の瀬戸山重郎宅で休息しました。疲れた西郷が腰掛けたという石が今も「西郷の腰掛け石」として庭先に残されています。その際、帖佐人形を庭に並べさせて鑑賞したという言い伝えもあります。



西郷の腰掛け石

始良歴史ボランティア協会発足10周年を迎えて

会長 竹之下 洲一



歴史民俗資料館

始良歴史ボランティア協会は、平成19年4月発足から今年3月で10年になりました。

始良歴史民俗資料館の活動の支援を行い、併せて会員相互の親睦と交流を図ることを目的に結成されました。現在まで歴史民俗資料館の諸活動のお手伝いや、始良市内の史跡ガイドなどを行ってまいりました。

発足当初は旧始良町だけの活動でしたが、平成22年3月の3町合併後は、加治木・蒲生両町の史跡ガイドの研修などを積み重ね、多くのグループの皆さんと、市内203件もある文化財などを楽しく巡っています。

今後とも諸活動を通して、始良の歴史を多くの方々にわかりやすく、正確に伝えていくための努力を続けてまいります。皆様方のご支援をよろしくお願いいたします。

編集後記

今年5月の「歩き・み・ふれる歴史の道」で、久しぶりに岩剣城跡登山をしました。

時に急な坂道もあり、約50名の参加者と共に汗だくになりながら頂上に着きました。

眼下に広がる絶景を見ながら「岩剣城の戦い」など連想することでした。

皆様方からのガイド要請を心よりお待ちしております。

連絡先 始良市民俗資料館 0995(65)1553